

## 論文の要旨

論文題目 張愛玲と林芙美子の比較研究  
——作品における母娘関係  
氏名 顧 蕾  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成17年9月30日

中国と日本は、1840年のアヘン戦争と1868年の明治維新をきっかけに、それぞれ近代化の道を歩み始めた。この近代化によって、両国の従来の家制度と家父長制は西洋からの影響を受け、変化を遂げた。中国の近代化は半植民地からの出発であるため、亡国の危機に脅かされていた。他方、日本は半植民地に陥る危機を免れただけでなく、軍事大国へと進んでいく。両国の近代化の過程が異なるため、両国の近代女性作家は自国の家父長制に対して、異なる認識を形成した。

近代化の過程において、中国でも日本でも女性解放運動が国家体制の一部を改革するものとして行なわれた。女性は教育を受ける権利と社会進出を果す機会を手に入れたが、しかし女性の地位から見ると、女性は真の解放を獲得したとは言えない。本論は、両国の女性が家における立場を考察・比較するために、一貫して女性の視点を放棄せず、思想を高唱せず、創作活動を行った張愛玲（1920-1995）と林芙美子（1903-1951）の作品を分析・比較した。

張愛玲は中国近代文学史上もっとも優れた作家の一人であり、女性の視点から秩序の重圧を語りつづけた人物でもある。林芙美子は張愛玲ほど、文学史上での地位を築いていないが、しかし女性の生存状態に注目しているには変わりがない。貴族の後裔という誇りとそれに伴う苦しみを背負う張愛玲と、私生児として社会の底辺から出発し、人気作家になる林芙美子が成長し、活躍する過程から、当時の時代背景を窺うことができる。

日中両国の女性作家に関する従来の研究では作品における母娘関係を中心とするものは少ない。私は、父権の重圧を語るには、母親と娘の関係を究明することが不可欠だと考えている。張愛玲と林芙美子の生涯及び創作に対する母親の影響力は極めて大きいし、母娘関係を描く作品の数も当時の他の女性作家に比べればかなり多い。母親に向かう視線は作品に投影されている。本論は、母娘関係を分析・比較することによって、家の内部における権力構造と女性の家における立場を明らかにした。さらに、女性作家は秩序の内部にどのように自分を位置付けていたのかを考察した。

本論の第一章は、まず日中両国の近代化に伴って変化する家制度と家父長制の変化、

及び女性たちの歩みを追ってゆき、張愛玲と林芙美子が創作を行った背景を明らかにした。

近代中国と日本の家制度は、伝統を部分的に継承しながら、当時の国家建設に適合する形へと変化していった。民族存亡の危機に直面していた中国の知識人たちは、辛亥革命（1911）以後、新文化運動を発動し、儒教とそれを支えとする家制度を激しく批判した。新文化運動は「父親殺し時代」の幕開けとなり、張愛玲の母親と同じ世代の女性に深く影響した。一方、日本の知識人は儒教思想を徹底的に否定するのではなく、西洋思想との調和を目指した。中国と日本はそれぞれ宗族、あるいは大家族の家長の支配権を弱め、その代わりに、支配権を父親の手に集中させた。両国とも男性優位を基本とし、女性は家長としての権力を振るうことは難しかったことが確認できる。両国の女性作家は女性の苦しみを描き、その原因を探った。作家によっては母性賛美を、苦しみを緩和させる方法としているが、張愛玲と林芙美子はともに母娘の絆の断絶を描いている。

本論の第二章から第四章の三章にわたり、テキスト分析を通じて、父親が支配している家における母娘関係、父親不在の家における母娘関係と、不在の母親に対する娘の思いを考察した。

第二章では、張愛玲の作品「花凋」と「心経」を中心に、父親の権威に対する張愛玲の考えをまとめた。この二篇の作品に登場している父親は、前者が家の没落によって社会的地位を失い、後者は資産家として社会的地位を築いた。立場がまったく異なっているにもかかわらず、二人は同様に家族に対する支配権を握っている。張愛玲は前者が統治している家を暗闇の舞台とし、後者が築き上げた「理想的」な家の奥に隠されている父親の欲望を暴露した。張愛玲はこうして、母娘関係の断絶を父権支配に原因を帰し、父権の正当性を完全に否定した。

林芙美子は逆に強大な父親の必要性を唱え、母娘の絆が保持される必要性を否定している。「青春賦」の母親が果たした役割と三人の娘がした選択から分かるように、母親の沈黙と欠席、母娘の精神的繋がり、断絶は問題とされないばかりか、秩序を維持するには必要なものであり、娘の成長過程における不可欠な一環であるとされている。

第三章では、張愛玲の「沈香屑——第二炉香」と「金鎖記」、林芙美子の「女家族」と「折れ葦」を中心に、父親不在の場合における母娘関係を分析、比較した。

張愛玲と林芙美子は二人とも、父親の不在を母親が家の支配権を獲得する前提としながら、それは母娘関係が修復するきっかけになるとは考えていない。権力を手に入れた母親と娘の関係について、張愛玲と林芙美子は異なる見解を示している。張愛玲は畸形として現れた母権支配がもたらす恐怖を描き、父権秩序が崩壊する原因と必然性を間接的に指摘している。しかし、母親の支配は欺瞞と暴力によって維持されているため、娘への「一心同体」の強制は母親自身と娘を解放できない。

林芙美子は張愛玲に否定された父権秩序の合理性に固執している。「女家族」の母親は一時的に父親の代理者となることができるにせよ、娘たちが期待しているのは強大な

男性家長である。母親と娘の不信と分離は娘の成長に不可欠な条件とされ、娘の結婚は秩序への回帰と位置付けられている。また、林芙美子は「折れ葦」を通じて、「女」の部分の喪失が、女性を不幸にしたと考え、母親の責任も追及した。

第四章では、母親が不在の場合、娘の心に浮かぶ母親像がどのようなものなのか、という問題を探求した。張愛玲の「傾城之恋」、「桂花蒸——阿小悲秋」と「多少恨」の共通点は、母親を娘の過去の記憶に位置付け、母親を見る娘の冷靜的な視線を描いているところにある。張愛玲と異なり、林芙美子の同類の作品は母親に抱く娘の幻想、母娘の虚構の絆を描いている。第二章と第三章の分析から分かるように、林芙美子が描く母親は常に沈黙を保つ存在である。この沈黙によって娘は母親と心理的な距離を感じている。しかし母親が不在の場合、娘は母親の幻影に母娘の絆を求めるようになる。これは、母親の死によって、母親の沈黙に対する娘の怒りは静まり、母親の理想化は娘が現実を逃避する手段となったからである。また、林芙美子の前期の作品「愛情伝」、「女の日記」、「母娘」と後期の作品「骨」、「暗い花」を比較した結果、父権秩序に対する林芙美子の支持は日本の敗戦によって変化したことが分かった。「愛情伝」の娘は母親の面影を持つ男性に恋し、母親の代わりを手に入れ、母親との分離を果たした。戦後の「骨」は「愛情伝」の明るさを一掃している。父親を始めとする男性たちは弱者として描かれ、母親の幻影は、秩序の崩壊とともに現れた空白を埋める形として、戦後の廢墟に生きる戦争未亡人の娘の脳に浮かび始める。「愛情伝」の亡き母は娘を慰める役割を果たしているが、「骨」の亡き母は全ての始まりであると同時に、全ての生命が帰らなければならない終点を象徴し、娘の恐怖を引き起こすまでの権威を持っている。

「女の日記」、「母娘」と「暗い花」は亡き母ではなく、遠方にいる母親を描いている。「女の日記」の母親と娘は会えなかったが、しかし「母娘」と「暗い花」の母親は同じく故郷から東京に生活している娘を訪ねてきた。母娘の対面についての描写の相違は林芙美子の考えの変化を表している。「母娘」は母親と娘の間の温情を描き、またその温情を暗い現実を照らす光と見なしている。しかしその十三年後に発表された「暗い花」はその微かな光さえ失っている。「暗い花」の母親は、娘の慰めになれないばかりか、娘を頼りにしている。林芙美子は、戦後の厳しい現実の前で、母親の絆がどのように無力なものであるかを示している。

最終章は、張愛玲と林芙美子の放浪人生を振り返り、前章までの分析を総括した上で、二人の作家が父権秩序に抱く態度を明らかにした。張愛玲が清朝貴族の後裔として生まれた時、清朝は既に滅亡し、張氏一族も没落していた。家の盛衰、家族の離散を経験し、その上、戦争によって夢と努力が水泡に帰した張愛玲は、自身の体験を、中国が追い込まれた苦境と一体化させ、救いようのない絶望に囚われた。張愛玲は新しい時代に期待感を抱くことができなかったので、父権秩序の崩壊、そして、その崩壊過程における母娘関係の断裂を描いている。他方、林芙美子は下層社会から自分の力で脱出を果し、流転と苦勞の末、流行作家に躍進した人物である。彼女の強い成功志向は、日本が野望を

膨らませ、版図を広げようとする動きと重なっている。林芙美子の秩序に抱く信頼感と秩序への強い順応性は、母娘の絆に対する否定に繋がる。

張愛玲の父権批判に反して、林芙美子は強大な父親を、娘に安らぎを与える故郷だとしている。父親を追い求める娘の放浪は秩序の中で終点に辿り付くことが可能である。秩序が崩壊し、廃墟に化した時点しか、娘が母親との絆を確認できないが、しかしその時の母親は亡霊に過ぎず、娘を救い出すことができない。他方、張愛玲が描く娘は父親の家から逃亡する。母親に期待をかけていないため、その逃亡は、目的地のない、永遠の放浪となった。言い換えれば、張愛玲の放浪は秩序の外側での放浪であり、林芙美子の放浪は秩序の内側での放浪である。

張愛玲の父権批判は一貫性を持っている。他方、林芙美子の作品は日本の敗戦を境界線に父権の合理性を唱えることから疑いを抱くまでの態度の変化を見せている。敗戦による古い秩序の崩壊だけでなく、女性の運命に対する深い関心も、この変化を促した要因だと思われる。しかし、林芙美子は張愛玲のように父権秩序に対する全面的な否定とそれ故の逃亡願望を抱いていない。そのため、古い秩序が崩壊後、林芙美子は放浪の終点を新しい秩序の内部に設定した。父親の権威を全面的に否定しながら母娘の絆を救いとしない張愛玲は、父の娘でもなく、母の娘でもない。しかし林芙美子はまさしく父の娘である。これは二人の作家の根本的な相違点だと言えよう。